

三鷹市山本有三記念館企画展



### 『日本少国民文庫』

#### が灯ともしたもの

―若き編集者たちとの交流―

令和2年9月12日(土)

〜令和3年3月7日(日)



長男が中学校へ進学した昭和9(1934)年、山本有三「1887-1974」は、父親としてある問題に直面します。それは、自身の成長期にある子どもに読ませるふさわしい本や雑誌が見当たらない、ということでした。

当時、経済恐慌による不況を背景に、商業主義に傾いた大衆的な雑誌が大きく出版部数を伸ばし、それは子ども向けの読み物においても例外ではありませんでした。

加えて、大正末期から昭和初期にかけて起こった「円本ブーム」によって、廉価かつ巻数の多い叢書が競い合うようになり出版されたことで、子ども向け雑誌の多くが淘汰され、相次いで廃刊を余儀なくされていきました。

昭和10年の「文藝春秋」に掲載された座談会

「子弟の教育を如何にすべきか」において、有三は、「実際、私は声を大にして子供の雑誌がないといふ事をいひたい。」<sup>(\*)</sup>という問題を提起しています。

我が子のために良い本を見つけない、という想いは、次第に、次代を担う子どもたちが「世界を見る大きな眼と、高遠な志」<sup>(\*\*)</sup>をつちかう糧となる本を作らねばならない、という使命感へと変貌を遂げていきます。

あの年頃の子供たちこそ、これからの日本をしようとした人たちぢやないか。もう固まつてしまつた大人は何をいつても仕方がない。年のいかない子供達だけは、何とか大きく真直ぐに延びていつて貫はなければ困るよ。<sup>(\*\*\*)</sup>

有三は、新潮社に企画を持ち込み、賛意を得ると、直ちに子どもたちのための新しい本、すなわち、『日本少国民文庫』発刊の準備に取り掛かりました。

\* \* \*

発刊にあたり、有三は、児童書の編集経験にはこだわらず、自らが見込んだ後進たちを編集者としてスカウトしています。

長く哲学を学んだ経歴を持つも、社会主義運動への接近によって治安維持法に抵触し、失職中であつた吉野源三郎を筆頭に、文藝春秋社を退社したばかりの石井桃子、明治大学文芸科で

教鞭をとる吉田甲子太郎ら、才気あふれる人物たちが『日本少国民文庫』の編集者として集められました。

執筆陣には劇作家の岸田國士、物理学者の石原純などの各分野の第一人者のほか、新進の学者たちも数多く加わりました。

編集者・執筆者が一堂に会しての会議は談論風発、「知的な人たちが自由に話すと、こんなに楽しいんだ」と思った、と、編集者の一人である石井は後年振り返っています。<sup>(\*\*\*)</sup>

六十回を超える綿密な編集会議が重ねられた『日本少国民文庫』は、「人類の進歩」という共通のテーマに基づいた全十六巻の叢書となることが決められました。

出来上がった叢書は、恩地孝四郎の上品な装幀に彩られ、それだけでも他の子ども向けの読み物と一線を画す仕上がりであつたと言います。その質の高さに呼応するように、『日本少国民文庫』はたちまち好評を博し、戦後まで改訂を重ねながら読み継がれていきました。

本展では、「心に太陽を持って」「君たちはどう生きるか」といった表題作とともに当時の子どもたちに愛され、現在もその輝きを失わない『日本少国民文庫』の魅力と、同時代におけるその意義を探ります。

『日本少国民文庫』の刊行に携わつた人々が入りを重ねたこの「三鷹の邸宅」で、若き編集者たちとの交流から生まれた本書への理解が深まれば幸いです。

(文芸企画員・字芸員 三浦穂高)

\*1:「子弟の教育を如何にすべきか」(『文藝春秋』第13巻第3号、昭和10年3月)

\*2:「山本有三」この本を読むみなさんに

(『日本少国民文庫』第12巻、心に太陽を持って、新潮社、昭和10年11月)

\*3:吉田甲子太郎『日本少国民文庫が生れるまで』(『書窓』第2巻第4号、昭和11年1月)

\*4:尾崎真理子『ひみつの王国 評伝 石井桃子』(新潮社、平成26年6月)

# 編集者・山本有三の慧眼

## 「日本少国民文庫」の意義と宮沢賢治

遠藤 純 (武庫川女子大学准教授)

『佐藤義亮伝』(1)には、(新潮社が初めて少年少女向きの本を手がけた)(傍点筆者、以下同)のは、山本有三編「日本少国民文庫」(昭和十年十一月刊行開始)との記述がある。が、これは厳密には正確ではない。新潮社には大正九年、

『三太物語』で著名な青木茂のお話集『智と力兄弟の話』があり、また大正末く昭和初年にかけては、西條八十や北原白秋の童話、トルストイやアンデルセンの童話、さらには「愛国少年文庫」と称する叢書(山中峯太郎や池田宣政、久留島武彦など全五冊)が刊行されていたからである。

しかし、冒頭の引用には続きがある。へ：を手がけたものであり、誇りを以て世に問うた出版でもあった。山本有三から持ちかけられ、叢書の出版を決断・承諾した佐藤義亮の意識下においては、「日本少国民文庫」こそ「新潮社として初の児童書」であったと言えるのかもしれない。

有三と新潮社の関係は、大正十三年にまで遡る。同社から『演劇新潮』が創刊されたとき、一年に渡って編集主任を務めたのが有三であった。久米正雄は、雑誌創刊前から有三が緻

密な一年計画を立て、各月の予定を既に割り振っていたことに驚いたという。のちの有三の編集者としての用意周到さは、こうした経験から確立されたのではなからうか。

さて、「日本少国民文庫」(全十六巻)は、『心に太陽をもて―胸にひびく話二〇編―』(昭和十年十一月)を第一回配本として刊行開始となり、以後基本的に月に一冊のペースで出版、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』(十二年八月)を最終配本にシリーズ完結となった児童向け叢書である。

菊池寛、豊島与志雄を助言者に得、かつ有三の周囲にいた吉野源三郎(編集主任)、吉田甲子太郎、高橋健二、石井桃子らが編集に参加。恒藤恭、石原純、水上瀧太郎、里見淳ほかが執筆した。昭和十七年及び戦後の二三年にもそれぞれ改訂を加えて版を重ね(全巻構成も変更)、さらに昭和三十一年には「新編・日本少国民文庫」(全十二巻)を出版した。戦前・戦後、そして今日に至るまでその一部が読み継がれる日本の児童文学史上稀有な存在であり、類例のないものとなっている。叢書全体を企画・立案し、編

集者を組織してまとめあげたのが山本有三であった。編集者としての才覚を多分に発揮したと言える。

叢書の特徴および独自性は、文芸面にのみ偏するのではなく、人間全般に関する問題について、広く科学・スポーツ・哲学・倫理・伝記・教養といった分野・要素を国際的視野から配したところであろう。人間いかに生くべきか、その根源的な問いを(小学児童期を終はる頃から青年時代に至るまでの少年や少女たち)という所謂ヤングアダルト世代に向けて発信、童話から小説への橋渡しとなる書物として届けたのである。

類書がなかったわけではないが、同時期の子ども向け読み物の多くが時局の影響を受けざるを得なかったのに対し、「日本少国民文庫」はあくまでリベラルかつ深遠なるヒューマニズムを希求した編集方針を貫き、偏狭なナショナリズムから読者を解放する姿勢で統一されていた。これは、多くの編集者を抱えながらも、「総編集」という役割を担った有三の力量に負うところ大であったと言わねばならない。編集に関与した人の多くが、その後直接・間接に児童文学への関心を高め、この分野に貢献していったことを思うとき、有三のエディターとしての存在感・影響力の大きさをあらためて感じるのである。

こうして誕生した叢書は、(良心的で文化性の高い、しかも全体として格調の高い文体、感銘にあふれた内容をもった企画)(3)、(軍国主義思想の高まりつつあった時代に、国際的視野

に立つヒューマニズムを子どもたちに伝えようとしたこの叢書の功績は高く評価すべき<sup>(4)</sup>、言論統制が本格化していく情勢において時代的抵抗精神を象徴するもの<sup>(5)</sup>という高い今日の評価が定着している。先を生きる世代として、有三の子どもへの責務と、正義感に貫かれた強固な意志が本叢書を誕生させたと言えよう。

ところで、本叢書は多くの優れた作家や研究者、翻訳者らの作品を世に送り出したが、なかでもひとときわ眼を惹くのが、当時児童文学の書き手としては無名だった宮沢賢治の作品を掲載したことである。明治二十九年、岩手にて生まれた賢治は、既に大正十三年には心象スケッチ『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を自費出版し、いくつかの雑誌で詩や童話を発表していたものの、児童文壇ではいまだ定位を持たない存在であった。有三は第八巻『人類の進歩につくした人々』では「雨ニモマケズ」を、十六巻『日本名作選』では「オツペルと象」を、それぞれ取り上げた。

なにゆえに、無名ともいえる賢治作品を選択したのか。有三の編集者としての眼力は、賢治のどこに注がれたのだろうか。『人類の進歩につくした人々』について考えたい。

昭和十二年一月に刊行された同書には、リンカーン、キュリー夫人、ベートーヴェンの各伝記を収録したが、三偉人のなかでもとりわけ頁を多く割いたのが力作「リンカーン伝」である<sup>(6)</sup>。この作品では、奴隷解放のために生涯を捧げ、彼らの自由と権利を保障するために終生

尽力した人物としてリンカーンが描かれた。〈生涯の目標を世間的な成功におかず、自分一個の幸福のためよりは、自分たちの時代の大きな宿題のために働こうと考へて生きて来た〉<sup>(7)</sup>とそこにその素晴らしきがあつたと力説し、彼こそ人類の進歩につくした人であり、読者に〈リンカーンと同じやうに、自分一人のためではなく、世の中の進歩のために働くことが、本当に生きがひのあることだとは思ひになりませんか〉<sup>(8)</sup>と問いかけるのである。こうした視点は、この当時有三が書いた作品にも共通して見られる。

「はにかみやのクララ」(『主婦之友』十二年一月〜三月)にしる「ストウ夫人」(同前、十三年一月〜三月)にしる、その根底を脈々と流れるのは人類のためにいかに生きたか、その進歩にいかん貢献したかという視点であり、彼はそれを基軸とした人物伝に意欲的に取り組んだ。それは軍事色が濃厚になり、厳しい言論統制が行われていくなかで、有三が良心的な文学者として書かずにはいられなかつたヒューマニズムであり、時勢に抗うなかで打ち立てようとした一つの倫理であつた。

賢治の「雨ニモマケズ」収録についても、有三の編集基準に照らして考えたとき、クロウズアップされるのは東北農民の貧困をいかに救うかに終生尽力した農民科学者・実践者としての賢治像である。こうした賢治への共感が「雨ニモマケズ」収録へと向かわせたのではないか。文学に生きた詩人・童話作家としての賢治ではないが、当時の賢治受容の一面が垣間見

えるように興味深い。一篇の詩や雑文に至るまで、有三は妥協することなく厳しく素材を吟味したとされる。編集者としての才覚や慧眼が、児童出版史に残る名著としての「日本少国民文庫」を結実させたわけであるが、その編集過程で賢治へ行き着いたところにも有三の確かな先見性をみる事ができる。以上の有三の視線はこの後、戦時下の賢治受容に少なくない影響を持つことになるのである。

(注) 1 天野雅司編『佐藤義亮伝』(昭和二十八年八月、新潮社)  
 ※佐藤義亮は新潮社の創業者で、本書は佐藤の評伝である。  
 2 吉田甲子太郎「日本少国民文庫が生まれるまで」(『書窓』二巻四号、昭和十一年一月、アオイ書房)  
 3 鳥越信「日本児童文学案内」(昭和二十八年八月、理論社)  
 4 日本児童文学学会編『日本児童文学概論』(昭和五十二年四月、東京書籍、執筆西田良子)  
 5 菅忠道「日本の児童文学 増補改訂版」(昭和四十二年五月、大月書店) 本作は山本有三著となつてはいるが、実際には吉野源三郎の筆であつたことがわかつてはいる。しかし、編集者として有三は素材の選択から草稿チェックまで入念に行つており、叢書にかかるすべての最終決定を有三が実施した。  
 6 山本有三「人類の進歩につくした人々」(昭和十二年一月、新潮社) 注7に同じ

### 遠藤 純 (えんどうじゆん)

1968年京都市生まれ。武庫川女子大学准教授。専門は児童文化史。編著『日本児童文学文献目録』(日外アソシエーツ 2019年)、『藤子・F・不二雄大全集』ぴーたんばん(小学館 2013年)、『児童文化と子ども文化』(港の人 2012年)など。



## コラム 山本有三と吉野源三郎

次代を担う子どもたちのために新しい本を、という有三の想いから企画された『日本少国民文庫』ですが、その背景にはもう一つ企図されていたことがあります。それは、当時失職中であった吉野源三郎 [1899-1981] に仕事を与える、ということでした。

昭和6 (1931) 年、吉野は、治安維持法に抵触したことによって逮捕され、一年半ほどの間、投獄されています。その影響から出獄した後も勤め先を得られず、くすぶっていたのを見かねて、有三は、吉野に『日本少国民文庫』編集の仕事を持ち掛けたのです。

当初は、子ども向けの読み物のために二年余りの歳月を割く気になれず、引き受けようとしなかった吉野でしたが、有三の説得を受けて、文庫の発刊に携わることとなります。

編集主任としてまとめ役を務めるとともに、『日本少国民文庫』第五巻、「君たちはどう生きるか」の執筆を手掛けました。哲学を学んだ吉野ならではの、人生をいかに生きるべきかを問いかけたこの作品は、当時の少年少女たちに深い感銘を与え、また、近年においても漫画化されて再注目を果たした息の長い作品となっています。

『日本少国民文庫』の編集として働いたことがきっかけとなり、吉野は昭和12年から岩波書店に勤め、岩波新書の創刊や雑誌「世界」の編集に携わりながら、編集者として後半生を送りました。戦中から戦後にかけて、親しく往来する機会こそ途絶えましたが、有三の亡くなった後も、吉野は「常識では考えられないほどの無償の好意を私に注いで下さった」(山本有三全集 第10巻付録「山本さんと私」 新潮社 昭和52年)と、有三から受けた厚情について振り返っています。



吉野源三郎「君たちはどう生きるか」  
(『日本少国民文庫』第5巻 新潮社 昭和12年)

## 事業報告



▶令和2年1月18日(土)～26日(日)開催

## 第6回三鷹市山本有三記念館 スケッチコンテスト

三鷹ゆかりの作家、山本有三の旧居であり、市有形文化財でもある建物の魅力と、「文化の薫り高い三鷹」を広く発信することを目的として開催しているスケッチコンテスト。第6回目を数える今回は、市内外から71点のご応募があり、公会堂さん館にて開催されたコンテストには、多くの皆様にご来場・ご投票いただきました。

応募作品は、いずれも個性豊かな作品ばかり。来場者からは「同じ建物や風景でも表現の違いが毎年新鮮」、「力作ぞろいで感動した」といった感想が多数寄せられました。

受賞作品は2月4日(火)から3月8日(日)まで山本有三記念館内で展示しました。ご来館の皆様が足を止めて作品に見入る姿がとても印象的でした。



ガイド  
ボランティア

新型コロナウイルス感染症対策のため、ガイドボランティアの実施と団体見学の受付は、当面休止します。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27  
TEL 0422-42-6233

ホームページ

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

入館料：300円(20名以上の団体200円)

・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス2020」利用者は無料

※受付にて「年間パスポート(1,000円)」を販売しております。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分